



馬耳東風

昔私が某大学の助手であったとき、日本動物福祉協会から、「実験動物の世話のお手伝いをしたいと言って来ている英国動物福祉協会の人がいるのだが受け入れてくれないか？」という申し入れがあった。教授は快諾し、私に失礼のないよう対応するようにと厳命した。当時のわが国の実験動物に対する認識は今では考えられないほどヒドイものであったが、件の英国人はそのような実情を知り、「何とか改善の役に立ちたい」と考え来日したということを後年知った。

どのような人なのか緊張して迎えた初日、小柄で華奢な若い西洋人女性が彼女よりも大柄な日本人女性に伴われて研究室に来了。早速動物舎（当時われわれはこのように呼んでいた）に案内すると、「作業は私たちでやりますから」と言われたので私は研究室に戻った。彼女らが帰ったあと動物舎に行くと、部屋は大掃除の後のようにきれいであったが、何よりも驚いたことに、ネコや子犬を飼育していたウサギ用ケージの床網の上にバスタオルが敷かれていたのである。これは当時のわれわれには驚天動地といっても過言ではないほどのショックであった。われわれには間違いなく、実験動物と愛玩動物は別という意識があったからである。

彼女は「こうしなければいけない」とは決して言わず、それどころか「一緒に世話をしましょう」とも言わなかった。自身の行動でわれわれの実験動物に対する認識を改めさせようと考えたのであろう。われわれは、それまでの管理がいかにいい加減であったかということを感じ、改善に努めたことは言うまでもない。わが国の医学部に動物実験施設ができるようになったのは大分後

のことであった。

この英国人女性はロスさんといったが、動物の世話（および動物舎の清掃）が終わったあと、研究室で「何をお飲みになりますか」と尋ねると、“I am an English.” としか応えてくれなかった。小生として「英国人は紅茶好き」ぐらいは知っていたが、こういう言い方をされるとは夢にも考えていなかったもので、大変驚いたことを未だに記憶している。その後も彼女は “That’s French.” とか、事あるごとに「自分は英国人である」ということを言葉の端々に匂わせていた。私は彼女の行動に対する尊敬の念とは裏腹に、このような物言いには反感すら感じていた。が、ある時、英国初の英語辞典を作ったサミュエル・ジョンソンが、「カラスムギ」の説明に「カラスムギは England ではウマに与え、Scotland ではヒトを養う」と注釈したという英国人 ism そのものの逸話を知り、「そうか…」とその自意識の強さを納得したのであった。

そのことを最近改めて強く感じさせられたのは英国の EU 離脱である。近年のグローバリゼーションの中、あえてこのような選択をしたのは、単に難民や移民受け入れに EU 基準を適用されたくないということだけではなく、底流には英国人 ism があるからだと感じる。「ヨーロッパの統合」という理想に敢えて逆らう EU 離脱が、英国にどのような影響を及ぼすのか私にはわからない。しかし、ジョンソンの定義に対して、スコットランド人である弟子のボウズウエルから、「だから England のウマは立派で、Scotland では人間が優れている」といった痛烈な反撃を喰らうような事態になることだけはないようにと、若くして亡くなったロスさんのためにも願っている。 (久)